

浮きたつ雲の行衛をや、浮きたつ雲の行衛をや、風の心にまかすらん

（本調子） 爰に消し彼処に結ぶ水の泡の

浮世にめぐる身にこそありけれ

実にや人知れぬ、心は重き小夜衣の、恨みん方もなき袖を

片敷きわぶる御夜詰めは、君が守護なす両勇士、実に唯ならぬ多田の御所

武将源の頼光公、御心地例ならず、医痔百計たゆみなく、取々さまざまと意労尽して夜昼の、界も知らぬ粧の、心尽しに身をせめて、

鬼をあざむく武夫の、思に沈むばかりなり

小夜嵐身に入る程に物凄く、宿直の武者も扱こそと、眠気覚しに取る煙管、火皿の煙立登る、折しも丑三つ頃にしんしんと、更け渡る夜も

烏羽玉の

（二上り） 切禿都育ちの京人形

ちよこちよこ歩む後紐、お茶の通ひのにこにこにこと

合点合点しほのめかぶり振り振りふらぬ間に、摘みて置けとは

拇の尾山の、春の若草茶の木の事よ

ちやちやに浮してやつこの、ちやちやに浮してやつこの、此の茶参ろと差し出す

（本調子） 偕も優しき童と、顔しげしげと打詠め、そは誰人の子なるぞや

月の澄む軒端にかかるささ蟹の、ありやなしやの身を如何に

其の月の数覚えばか

さればいな

お月さまいくつ

十三七つ

雲かかれば

風をもつて吹払う

大千世界はさて如何に

オ、夫れこそは風

清くすめるに誑かされて、伸ばせば伸ぶる糸筋の、棚引き登つて天となり

切れて落つれば

地と成りぬ

又隠れん坊の始りは

遠つ神代のその昔

天の岩戸にかくれんぼ

今に伝へて神国の

子供遊となりにけり

雛の祭は

嫁入りの手習

幟甲や菖蒲打ち、しやうぶ刀は如何に、しやうぶ刀は如何に

夫れは武芸の始なり、駒の手綱をこれこれかう取つて

赤貝馬のしやんしやんしやん、しやんと乗つては手綱はいくりかいくり、轡の音はりんりんりん

天晴お馬の

上手と

上手と

乗つたか

乗つたぞ

しとしとしと

それそれそれと

化生は忽ち頼光の、寐所を目がけ入らんとす

こわ心得ずと公時貞光、ささへ止むる袖袂、かいくくりかいくくり

此処に現れ彼処に失せ

業通自在の其の振舞

ヤア小癩なと無二無三に、一度に刀抜つれて払へば

後に

有明の突止めんにもるためず、ねらひもためず切髪きりかみの、姿は消えて失せにけり、姿は消えて失せにけり